

昭和三十年の風景

三 春

三月になると思い出すのは、満開の桃の下、洋子ちゃんのおままごだ。引越してきたばかりの綺麗な男の子が招かれてお父さん役、洋子ちゃんはお母さん、私は子供役で、桃の木の下に敷かれた筵むしろの上で家庭生活の真似事を始める。今思えば、桜ではなく、ぽっちゃりとした桃こそがこの小さなお芝居に似合っていて、私のなかでは一つの絵のようになっていた。

昭和三十年といえば、どの家も貧しくて当たり前で、裕福な家の子は肩身が狭いという面白い時代だった。同じ年の洋子ちゃんはその時代にふさわしく生活力旺盛な悪童で、お金持ちの子供から小遣いを巻上げては私に紙芝居や駄菓子をおごってくれる。ところが私は身体が弱くて、外で買い食いすれば必ずお腹をこわしたり高熱をだしたりするので、自宅のおやつ以外は固く禁じられていた。でも、水飴に包まれた真つ赤なスモモは宝石のように輝いているし、つんと鼻をつく甘酸っぱい酔イカも籤つきアイスキャンディーも、掟破りを犯すに足る魅力に満ちていて抗いようもない。そのたびに具合が悪くなって母にばれてしまい、往診医がやってくるか、夕闇迫る街を父に背負われて医院に運び込まれる羽目となる。

つららかな春のある日、やはり病弱だった母が床に就き、いつもの医師が呼ばれた。豪放磊落な老医師は、まだ実習医の息子を連れてきた。幼児の私から見ても、うっとりするほど眉目秀麗な青年だ。診察中は邪魔だからと追い出された父は、中の様子が気になって庭をウロウロするばかり。

縁側の障子に指で穴をあけて覗き込んだ途端に老医師の一喝。

「おおい、オヤジ！ そんなところで何をこそこそやってるんだ」。縁側に差し込む陽が父の影をくつきりと障子に映しているのだから、見つかるのは当たり前だ。

あねご肌の華やかな母と、無骨で口下手な父。好奇心と嫉妬、からかう医師、陽だまりの縁側。まるで映画のひとこまのようで、思い出すたびに失笑と郷愁が交差して、これもまた昭和三十年の長閑な風景として私のなかに残っている。